第2節 朝河と入来文書の発見

東京大学史料編纂所は一九九八年に朝河没後五〇周年を記念して企画展「入来文書の世界」(於東京大学山上会館)を行った。その記念講演「入来文書と薩摩渋谷氏⁽¹⁰⁾」において、入来町出身の中世史家・山口隼正(史料編纂所教授を経て、当時長崎大学教授)は、朝河と入来文書との関係を詳しく解説してくれた。長い引用になるが、入来文書の発見から史料編纂所の所蔵に至るまでの古文書の運命をこれほどの確に説明した資料はほかにない。

そもそも入来院文書が存在が脚光を浴びたのは、近代日本が生んだ最大の国際的歴史家で、米国エール大学教授となった朝河貫一氏(明治六〇昭和二十三年、一八七三―一九四八)が代表作『入来文書』を出してからである。「中略」大正八年(一九一九)の帰国中、東京の史料編纂所で『薩藩旧記雑録』所収の入来院文書に着目、これを日欧封建制比較研究の最適な素材として選び、はるばる現地入来に赴き独自に原本調査を行った。史料編纂所として未調査の地である。

朝河氏は、エール大学在職中のこと、大正六〇八年(一九一七―一九)に日本中世史研究のために史料編纂所に留学した。その最後の年、大正八年六月に一週間余り現地入来村(当時)に滞在し、麓の入来院家(当主人来院重光氏、重尚氏の父)や村役場(当主重光氏が助役。村長は宮里榮氏)に通って入来院文書や清色亀鑑などを調査、筆写などに努めた。ただ系図などの調査の余裕はなく、現地の識者に筆写を依頼した。その三ヵ月後、九月に横浜港から帰米、以後、没するまで三十年間、再び故国日本の土を踏むことはなかった。(後略)

大正十四年、日本文『入来文書』の印刷が完了した。日本エール大学会々々長大久保利武氏(利通の子で、利謙氏の父)の世話により、三秀舎で印刷した。この日本文『入来文書』には、編年順に文書一五五点が配列されてい

るが、入来院文書のみならず、寺尾文書・岡元文書や清色亀鑑も収録し、それに薩藩旧記雑録から入来関係文書を抽出している。付録として、入来院氏系譜など系図類を収録する。〔後略〕

そして一九二九年（昭和四）春、英文 *The Documents of Iriki*（入来文書）も完成し、日英両文合冊の形でエール大学出版会とオックスフォード大学出版会から発行された。〔後略〕

〔前略〕史料編纂所が初めて入来に史料探訪したのは、大正十四年、龍肅（りょう・すすむ）編纂官一行が実施したときである（〔中略〕龍氏はやがて昭和十三年に所長となる）。〔後略〕

終戦直後、一九四八年（昭和二十三）八月に朝河貫一氏は米国で没したが、〔中略〕昭和二十年代の後半になると、朝河氏とその著書『入来文書』に対して再評価の気運が高まる。

〔前略〕同二十九年二月、東京において朝河貫一著書刊行委員会が設立され、委員長に松方三郎氏（正義の子息）がなり、松方氏自身が現地入来を訪れたりして、いよいよ『入来文書』再刊（増補）の運びとなった。同年秋、九州大学の竹内理三氏・秀村選三氏や史料編纂所の阿部善雄氏たちが現地入来町を訪れ、入来院文書など原本史料を調査する。

昭和三十年一月、入来院家文書をはじめ岡元家文書・寺尾家文書は、現地入来町麓を離れ、史料編纂所に移送（借入）された。史料編纂所では、早速、佐藤進一氏たちが委員として再刊（増補）の作業に取りかかり、同年十月、研究発表会（第三一回）で佐藤氏が「入来文書の研究」を行い、翌十一月、史料展覧会で入来文書として入来院家文書・寺尾家文書・岡元家文書を展示している。同年十二月、ついに『入来文書』として英訳付で再刊本（復刻版）が出された（日本学術振興会発行）。この再刊本において、〔中略〕日本文（古文書翻刻）の部分は、朝河氏による初刊本が編年順であったのに対して、入来院本家のみでなく、入来町内の諸家（岡元家、寺尾家、庶流入来院家、田中家）ごとに文書を配列して、『旧記雑録』などからの分は入来関係文書として総括し、総体的に文書を増補訂正し、念のため文書表題の下に初刊本における配列番号を付けている。そして、この再刊本には新たに西

岡虎之助氏・宝月圭吾氏・竹内理三氏の論説が添えられている（いずれも英訳文）。（後略）

『入来文書』が再刊された後、寺尾家文書と岡元家文書は、一旦、入来町の所蔵者に戻ったが、その後、寺尾家文書は中世文書・近世文書・それに祁答院旧記いずれも鹿兒島大学付属図書館に譲渡され（昭和三十八年（一九六三））、岡元家文書の方は鹿兒島県歴史資料センター黎明館に譲渡されている（昭和四十七年（一九七二））。

そして昭和四十一年（一九六六）、ついに入来院文書（および清色亀鏡）は当主人来院重尚氏から史料編纂所に譲渡（購入）されている。ここに『入来文書』の主体たる入来院家文書・寺尾家文書・岡元家文書は、実はいずれも現地入来町を離れてしまった。

ここで念のために、日本の大学図書館が朝河『The Documents of Iriki』各版をどのように所蔵しているか、念のために確認しておく。朝河貫一編『The Documents of Iriki』には以下の七種の版本がある。

- 【A】『The Documents of Iriki』英文初版（一九二九年版）の所蔵図書館は、以下の七図書館にすぎない。①九大図、②九大法、③交流基金本部図、④筑大、⑤東大史料図書、⑥日文研、⑦立大、である。【B】『The Documents of Iriki』英文第二版（一九七四年版）の所蔵図書館は、以下の七図書館にすぎない。①ICU図、②関外大、③慶応大三田、④国文研書庫、⑤上智大市ヶ谷、⑥日文研、⑦龍大深図、である。英文原書は【A】と【B】合わせて都合一四部が所蔵されていることになる。【C】一九五五年、

表 2-2 『The Documents of Iriki（入来文書）』各版の図書館所蔵状況

各版の出版年	図書館数
A 1929年	<i>The Documents of Iriki</i> , Yale Original [英文、日文] 7
B 1974年	<i>The Documents of Iriki</i> , Reprint by Greenwood Press [英文、日文] 7
C 1955年	『入来文書』日本学術振興会、復刻版 [英文、日文増補] 59
D 1957年	『入来文書』日本学術振興会、復刻版再版 [1955年版と同じ] 11
E 1967年	『入来文書』日本学術振興会、新訂版 [英文なし、日文のみ] 31
F 2000年	『入来文書』紀伊国屋書店、55年日本学術振興会版のリプリント版 [英文、日文] 28
G 1981年	阿部善雄・古川常深・本田親虎編『近世入来文書』東京大学出版会 [英文なし、日文のみ] 65

日本学術振興会版は五九図書館が所蔵している。㊦一九五七年、日本学術振興会再版は一一図書館が所蔵している。日本学術振興会版は㊧と㊨合わせて都合七〇図書館が所蔵している。後述の紀伊国屋版を含めると、都合九八図書館である。㊩一九六七年、新訂版（和文のみ、英文なし）は三一図書館が所蔵している。㊪二〇〇〇年、紀伊国屋書店版は二八図書館が所蔵している。㊫一九八一年、阿部善雄・古川常深・本田親虎編『近世入来文書』東京大学出版会版は六五図書館が所蔵している（以上、図書館名は調査時の引用元の表記に従った）。

第3節 『The Documents of Iriki』と古文書の入来（院）文書を峻別せよ

前節で山口隼正が指摘したように、一九五五年、朝河貫一著書刊行委員会によって『The Documents of Iriki』（日本学術振興会）が復刻された。その際に、朝河が執筆した英文の部分は一九二九年版のまま復刻したが、これには三本の英文解説論文と『入来文書』の増訂部分（日本語原史料）が付加された。これによって日本語部分は大きく様相を変えることになったが、朝河訳の英文テキストと文書番号と日本語原史料の文書番号の対応関係は、復刻版㊬のxxii頁に所収のIndex to the Japanese text of the documentsに示されている。それから一〇年を経た一九六五年に、朝河遺稿を集めた『莊園研究／Land and Society in Medieval Japan』¹⁴が出版された。

こうして一九四八年八月の朝河没後に盛り上がった顕彰運動が一九五五年にようやく結実し、さらに一〇年を経て、遺稿集が出版され、顕彰運動は一段落したわけだ。これらの顕彰のために多くのエネルギーが費やされたことは言うまでもない。関係者の労苦をねぎらいたい気持ちには強い。だが、その反面、この顕彰運動の限界あるいは欠陥も、半世紀を経て、明らかになっている。文字通りの後知恵になるが、いま顧みると、二冊の著書はどうか「編集方針を間違えたのではないか」という疑いを禁じえない。